

シェイクスピアの『ソネット集』と錬金術研究の現在（1）

藤澤博康

パトリック・チェイニー（Patrick Cheney）が編集した『エリザベス朝の短詩を教えるための手引き』（*Approaches to Teaching Shorter Elizabethan Poetry*, 2000）という、このジャンルを研究しようとする学生、それから彼らを指導する英文科の教員に向けた便利な文献・研究案内がある。この本のエリザベス朝文学の時代背景を学ぶ上で参考とすべき本を紹介した箇所、編者でもあるチェイニーはエリザベス朝のプラトン主義と新プラトン主義を扱った研究分野について、「この分野は、以前ほどは流行ってはいないが…」（“No longer as fashionable as it was…” Cheney 2000: 37）と話を切り出している。フランシス・イエイツ（Frances A. Yates）が『ジョルダノ・ブルーノとヘルメス主義の伝統』（*Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, 1964）でヨーロッパの知的伝統の地下水脈に光を当ててから、精神史以外の分野でもこの本の影響は広がり、イエイツ自身が出版した『世界劇場』（*Theatre of the World*, 1969）、『シェイクスピア最後の夢』（*Shakespeare's Last Plays*, 1975）などが次々と日本語に翻訳され、それらの影響を受けた読者は日本には数多くいるように思われる。しかし、唯物論に基づく新歴史主義や文化唯物論などの新マルクス主義が1980年代以降主流になったことを考え合わせると、チェイニーの言葉が表しているように、精神史を扱った一連の研究が研究の最前線から退いていたかのように映るのは仕方がないのかもしれない。

周知のようにイエイツの『シェイクスピア最後の夢』は、主にシェイクスピアのロマンス劇と呼ばれる彼の最晩年の劇、『あらし』（*The Tempest*, 1610-1611?）や『冬物語』（*The Winter's Tale*, 1623）、さらには『ヘンリー八世』（*Henry VIII*, 1623）を中心に扱ったものであった。ところが、いくつか錬金術的なイメージを含む『ソネット集』（*Shakespeare's Sonnets*, 1609）については、どういうわけかイエイツはまとまった論考を残していない。このような状況のもと、シェイクスピアの『ソネット集』にオカルト（隠秘）哲学、特に錬金術の観点から光を当てよう

とする研究が細々とではあるが発表されてきた。とりわけ、ロナルド・グレイ (Ronald Gray) の『シェイクスピア、愛について』 (*Shakespeare on Love*) とマーガレット・ヒーリー (Margaret Healy) の『シェイクスピアのソネット、錬金術、そして創造的想像力』 (*Shakespeare, Alchemy and the Creative Imagination*) が2011年の同じ年に出版された事実は、この分野への関心の高まりを示す証左であると言える。こうした錬金術を意識した『ソネット集』研究は、有名な W. H. 氏 (Mr W. H.) を筆頭に、このテキストに登場する「若者」 (the young man) や「黒い女」 (the black mistress) の正体をつき止めようとする研究がもてはやされてきたこの研究分野に、新たな視座を提供してくれるように思われる。

本論はこのような研究の流れを概観し、それらの紹介と今後の研究の可能性を提示することをめざすものである。この過程において小関恵美 (1985)、トマス・O・ジョーンズ (Thomas O. Jones 1995)、ペギー・シモンズ (Peggy Simonds 1999)、グレイ、ヒーリーの五つの論考を特に参照する。これらの研究を中心に、シェイクスピアの『ソネット集』と錬金術研究の現状について考察を加えてみたい。なお、本論は二部から構成されている。第一部に該当する今回の論考では、先に紹介した諸研究の概観を提示する。さらに、これらの研究をより小さなテーマごとに論じる考察は、今号以降の号で発表する予定である。

第一部 概観

1. 1. 小関恵美「ソネット 20 番における錬金術的象徴体系」(1985)

シェイクスピアの『ソネット集』を錬金術の観点から読み直そうとする研究を涉猟してみたところ、小関恵美の「シェイクスピア 20 番における錬金術的象徴体系」が世界のシェイクスピア批評史に照らし合わせても、先駆的な研究であることが今回の調査で判明した。ただ、この論文は日本語で書かれたものであって、本論で紹介する英語圏の研究者たちがこの論文を参照している形跡はない。「ソネット 20 番」(‘Sonnet 20’) で若者のことを「男でありながら、女でもあり、私の情熱を支配する君」(“master-mistress of my passion”) と詩人が呼びかけていることに関して、従来の批評が「内容に対して明らかな嫌悪を示しているもの、或は、男性に対するこのような呼びかけは、シェイクスピアの時代に慣習的なものであった、

また心理的にもこのソネットは同性愛ではなく異性愛を示している」としてきたのに対して小関は異論を唱えている（小関 30）。これまでの研究とは異なり、小関はこの一行に「錬金術的な象徴体系」の痕跡を見だし、とりわけこのソネットのもつ「両性具有及びその完全無欠性」に注目する（小関 32）。

「ソネット 20 番」の“master-mistress of my passion”という呼びかけに両性具有の意味合いを積極的に読み解こうとする試みは、英語圏では後に紹介するシモンズの論文まで待たなければならない。1986年の時点で小関の論文は日本人として収拾できうる資料を可能なかぎり揃え、小関は堅実な議論を展開している。とりわけ、研究者の間でも議論が分かれる、「ソネット 20 番」の7行目、“A man in hue all hues in his controlling”の“hues”という言葉に錬金術の観点から独自の解釈を与えている部分は示唆に富んでいる。16世紀の医師にして錬金術師でもあったパラケルスス（Paracelsus）の著作より「レービス」（Rebis）という「哲学者の石」に言及した部分に触れ、哲学者の石のもつ触れるものをすべて金に変えてしまう能力に小関は注意を喚起する。その上で、「シェイクスピアのソネット 20 番における“master-mistress”、『見るものを黄金色に変えてしまう』眼（l. 6）を持つ美青年に対応してはいないだろうか」と問う（小関 38）。たしかに小関がこの小論の中で述べているように、「黒色から白色を経て最後に赤色が現れることによって『哲学者の石』の精製が完了する」と考えられていた当時であって、「白の過程」（albedo）と呼ばれるものの直前には、さまざまな色彩が表れるとされており、それは『孔雀の羽、あるいは虹に例えられ』たという（小関 39）。さらにこれらの議論を踏まえた上で、小関は以下のように結論づける。「『哲学者の石』が、あらゆる色彩を含み、産出するものであることは、その両性具有性と同じく完全性の象徴なのである。従って錬金術の象徴体系を考えるならば、ソネット 20 番の“A man in hue all hues in his controlling”、『自身のうちにあらゆる色彩を支配する美しい君』を、完全性を称えるレトリックと読むことが可能になる。」（小関 40）

小関が議論の対象としているのは「ソネット 20 番」に集中していて、これだけで『ソネット集』の「錬金術的象徴体系」がすべて説明できるわけではない。しかし、“all hues”という語句に錬金術の痕跡を読み取ろうとする解釈は、正鵠を射ているように思われる。この論文をもとに、さらなる『ソネット集』と錬金術に関する

る研究が期待されるところであるが、現在のところこの論考に続く小関による研究は出版されていないようである。

1.2. トマス・O・ジョーンズ『シェイクスピアのソネット集のルネサンス魔術とヘルメス主義』(1995)

小関の論考が発表された1986年からほぼ10年の年月を経て、トマス・O・ジョーンズの『シェイクスピアのソネット集のルネサンス魔術とヘルメス主義』が『ソネット集』と錬金術の関連について英語圏で単独の研究書としてまとめられた最初の著作として出版される。この事実を見ても、いかに小関の論文が先駆的であったかが再確認できる。ジョーンズの著作は小関と並んでフロンティア的研究ではあるが、その先進性を差し引いても、ジョーンズの著作には数多くの欠点が認められる。ジョーンズについては、学問的な所属も背景も現在のところよく分からない。ただ、どうやら専門の研究のトレーニングを受けていない著者であるように映る。

実際、ジョーンズのこの著作については、『ルネサンス・クォーターリー』に掲載されたペンシルヴェニア州立大学教授のリンド・ウッドブリッジ (Linda Woodbridge) による辛辣を極める書評がある (Woodbridge 1998)。参照している二次資料が1960年代、70年代のものばかりで最近の研究を検討していないこと、文学テキストについての具体的な分析がきわめて少ないこと、注が施されておらず自分が参照した書物が雑然と注としてそのタイトルのみが巻末で列挙されているだけであることなど次々と本書の欠点が列挙される。その上で、ウッドブリッジは以下のように述べている。「では、ルネサンスの専門家以外の誰が、この神秘的な主題に興味をもつだろうか。おそらくジョーンズはオカルト好きな読者の中の、シェイクスピアの熱狂的な読者に訴えかけることを望んでいたのだろう。仮にそうだとすると、そうした読者たちが図版もなく、カバーも付いておらず、わずか180ページの本に79.95ドル支払えるだけの金銭的余裕があることを祈るばかりだ。」 (“But who, other than Renaissance specialists, would be interested in this arcane topic? Perhaps Jones hoped to appeal to Shakespeare buffs among the occult crowd. If so, may they be wealthy enough to afford \$79.95 for an unillustrated, un-dust-jacketed,

180-page book.” Woodbridge 679) と手厳しい。さらには、この研究書を出版したメラン・プレス (The Mellen Press) に悪態をつき、「いい加減な編集であるがゆえに、(中略) 学者たるもの、このシリーズで出版する前にもう一度よく考えるべきだ」 (“the slack editing ... should make scholars think twice before publishing in that series.” Woodbridge 679) と述べて、この書評を締めくくっている。

本書を読んだ読者として、このウッドブリッジの指摘のいずれにも同意せざるをえない。ただ、同時に評者であるウッドブリッジがはたしてシェイクスピアが活動していた当時の錬金術について、どの程度の知識をもっていたかについては疑問が残る。というのも、彼女はこの書評の中でジョーンズの『ソネット集』や錬金術の知識についてほとんど語らず、その学問的手法の拙さをこき下ろすことに専念しているように映るからだ。

ウッドブリッジの指摘するジョーンズの数々の致命的な欠点にも拘わらず、本書で言及されている書物の選択にそれほど間違いがないように思われる。たしかに『テンペスト』に登場するプロスペローをシェイクスピアの白魔術 (white magic) を体現した一種の理想像と捉えて、プラトン主義、新プラトン主義、錬金術などを一纏めにしてしまうなど問題はなくない。ただ、たとえば、オットー・ファン・フェーン (Otto van Veen) の『愛のエンブレム集』 (*Amorum Emblemata*, 1608) にわれわれの注意を喚起したりしている点は評価されるべきであろう。このようなそれなりに適切な資料に当たって本書を書いているのにも拘わらず、学問的な手続きの弱さがその観点の鋭さを鈍らせてしまっているのは残念である。

1. 3. ペギー・シモンズ「ボトルの中の性：ソネット 20 番における

シェイクスピアの両性具有の錬金術的蒸留」(1999)

こうした学問的な手続きの面で問題のあるジョーンズの著作と異なり、シモンズの論考は短い論文でありながら細部から『ソネット集』が孕む大きな問題を十全に論じ尽くす論文である。シモンズは「ソネット 1 番」(‘Sonnet 1’) で詩人が若者のことを「美のバラ」(“beauty’s rose”) と呼んだ後、「ソネット 5 番」、「6 番」で蒸留のイメージを用いて、そのバラからエッセンスを取り出し、容器に閉じ込めることでバラの香りを永遠のものにしようとする過程に着目する。さらに彼女はニコ

ラ・フラメル (Nicholas Flamel) の説にもとづき、『ソネット集』での詩人は蒸留した液体を閉じ込めておく容器がいわば女性の子宮を暗示し、その中に留まる若者のエッセンスと絡まりあい、一種の化学の結婚 (the Chemical Wedding) を実現していると主張する。この過程において、詩人の詩はまさに若者、すなわち「美のバラ」を蒸留しているのである。

... The poet's verse will distill "beauty's rose" and also serve as a memorial monument to him, since he will die sexually during the *coniunctio*. The alchemical *vas*, moreover, was often called a "viol" or a musical instrument in the shape of Venus or the mercurial female body that will produce the alchemical child, or the Elixir of Life. (Simonds 102)

この後、小関と同じく、シモンズは「ソネット 20 番」の "master-mistress of my passion" という詩人による若者への呼びかけに両性具有の問題を嗅ぎつける。シモンズは主にドイツでの薔薇十字運動の中心的役割を果たした、ミヒャエル・マイヤー (Michael Maier) のエンブレムやフーガといった象徴的要素を通じて神秘思想を伝えた『逃げるアタランテ』 (*Atalanta Fugiens*, 1617) から両性具有を表す図像を紹介し、そこから錬金術において重要な元素となる硫黄と水銀の関係について説明している。(図 1) で示した『逃げるアタランテ』の「エンブレム 33 番」 ('Emblem 33') では両性具有者が火で炙られている図像が提示され、それに以下のようなモットーが付されている。

石のすべての力は火に隠されている。

硫黄のすべての力は金に、水銀の力は銀にある。

All the power of the stone lies hidden in the fire,

All the power of Sulphur in the gold, the power of Mercury in the silver.

(Maier 171)

また、このエンブレムとは別にマイヤーは両性具有を不死鳥になぞらえ、以下のように述べているという。

The Phoenix is unique, it renews itself in the flames and rises revived from the ashes. It is only known to the Philosophers; it is burnt and called back to life. What other people invent about the Phoenix is pure fantasy. The Phoenix, however, is the Hermaphrodite with the mixed nature, of which the Philosophers speak; it has a male nature and a female nature, one of these natures passes into the other one by the addition of heat, and in this way a woman becomes a man.

(Simonds 104)

「エンブレム 33 番」のモットーと、上に引用したマイヤーの不死鳥について語った発言を頭に置いた上で、以下の（図1）をご覧ください。



（図1）ミヒヤエル・マイヤー『逃げるアタランテ』より
エンブレム 33 番「両性具有」（‘Androgyny’）

われわれは“master-mistress of my passion”のもつ意味をこれまで「女性のような顔をした男性」すなわち若者のことを指すと理解してきた。ところが、マイヤーの例に見るような顔を二つもつ両性具有の図像を前にすると、この一行が暗示する対照は二つの顔をもつ「両性具有」のような存在を指しているのではないかと思えてくる。また、マイヤーの解説を考慮して『ソネット集』を読むと、「両性具有」たる若者を「賢者の石」として詩人の詩によって蒸留し、そのエッセンスを錬金術的な工程を経て永遠のもの（第五元素としてのエリクシール）とする試みこそが『ソネット集』の中で行われていることではないかと思えてくる。このような論点に立つならば、両性具有や錬金術を考慮に入れたシモンズの研究はとかく若者、黒い女、詩人という主要登場人物間での愛憎入り混じった恋愛関係に想像を飛ばたかせる解釈に、一歩距離を置いて、このテキストを読み直す視点を与えてくれる。

ただ、シモンズの議論もマイヤーが関与していたとされる薔薇十字運動（Rosicrucianism）の影響を、シェイクスピアが受けていたとする仮説を受け入れられるかどうかにかかっている。両者は同じ時代の精神を共有していたかもしれないが、たとえばマイヤーの『逃げるアタランテ』の出版年は1617年であり、シェイクスピアの『ソネット集』が出版された1609年よりは少し時期を異にしている。この微妙な差異をどのように捉えるかによってシモンズの主張を受け入れることができるかどうか、違ってくるように思われる。

1. 4. ロナルド・グレイ『シェイクスピア、愛について』（2011）

本書は2006年に刊行された『シェイクスピア・サーヴェイ』（*Shakespeare Survey*）の59号に掲載された「宇宙の意志：シェイクスピアのソネット、プラトンの『饗宴』、錬金術とルネサンスの新プラトン主義」（‘Will in the Universe: Shakespeare’s Sonnets, Plato’s *Symposium*, Alchemy and Renaissance Neoplatonism’）での議論を発展させて、一冊の本にした書物である（Gray 2006）。¹ただ、残念ながら、グレイの論考にはこれまで紹介したジョーンズやシモンズの議論を前提に展開された形跡がない。その意味では、彼のこの分野での過去の研究史への沈潜は十分とは言えない。

もっともグレイが全く過去のシェイクスピア研究の成果を踏まえていないという

わけでもない。グレイの議論は彼自身序の部分で認めているように、ロバート・グルディン (Robert Grudin) のシェイクスピア作品に表れた二項対立を論じた著作、『強力なる対立、シェイクスピアとルネサンスの相反するもの』(*Mighty Opposites, Shakespeare and Renaissance Contrariety*, 1979) の影響を強く受けている。グルディンはノーマン・ラブキン (Norman Rabkin) の『シェイクスピアと共通の理解』(*Shakespeare and the Common Understanding*) で提唱されたシェイクスピアのテキストに頻繁に表れる「相補性」(complementarity) の概念を発展させ、グルディンの相反する二項が合一することを描いた場面をシェイクスピア作品に読み込もうとした。グレイはこのグルディンの著作から多くを学び、グルディンがシェイクスピアの作品に描かれた、相反するものの合一について指摘したことについて一歩踏み込んで、錬金術的合一を読み取ろうとしているところに特徴がある。それゆえ、シェイクスピア作品でくり返し描かれる、矛盾 (contradictions) や明確な対比 (stark contrasts) に注目し、これらの対立がプラトンの『饗宴』やルネサンスの新プラトン主義や錬金術に見受けられる愛に関する普遍的なヴィジョンと関連していることを示す試みとして、グレイの『シェイクスピア、愛について』を要約することができる (Gray 'Prologue')。

つぎにこの論考の構成についてであるが、『ソネット集』を大きく扱ってはいるものの、『ソネット集』自体を主に扱っているのは、合計七章あるうちの五章までである。残りの六章、「詩の女神」('The Muse')、七章、「対立の哲学のさまざまな認識」('Varied Perceptions of Philosophies of Opposites')、さらにはダンテとシェイクスピアを扱ったエピローグ (Epilogue) では、『ソネット集』についての議論をもとにシェイクスピアに関する周辺的な事象が論じられている。『ソネット集』を扱っている最初の五章にしても、最初の三章はともかく、四章では『ソネット集』と『アントニーとクレオパトラ』(*Antony and Cleopatra*, 1623) を、五章では「恋人の嘆き」と次第に議論は『ソネット集』からは逸れてしまい、ましてや錬金術の話題はほとんどが対立と矛盾の問題に置き換えられてしまっている。そういう意味では、本書は著作としての一貫性に欠けていると言わざるを得ない。

つぎに具体的なソネットの分析に目を転じてみよう。『ソネット集』に収められた個々のソネットについては、グレイはとりわけ、実際に錬金術への言及を含む

「ソネット 33 番」(‘Sonnet 33’) にこだわっているのがその特徴である。

Full many a glorious morning have I seen
Flatter the mountain tops with sovereign eye,
Kissing with golden face the meadows green,
Gilding pale streams with heavenly alchemy,
Anon permit the basest clouds to ride
With ugly rack on his celestial face,
And from the forlorn world his visage hide,
Stealing unseen to west with this disgrace:
Even so my sun one early morn did shine
With all triumphant splendour on my brow;
But out alack, he was but one hour mine,
The region cloud hath masked him from me now.
Yet him for this my love no whit disdaineth:
Suns of the world may stain, when heaven's sun staineth. (‘Sonnet 33’) ²

このソネットでは山の頂や緑の平原に太陽が光を降り注いでいる光景が、最初の四行で描かれている。とりわけ、このソネットでは四行目の「錬金術」(“alchemy”)という言葉が用いられている点にグレイは注目し、ここで言及されている太陽はただの太陽ではなく、詩人にとって若者を指すだけでなく、もっと超越的な力をもった太陽に比しうるものを暗示しているという。「詩人の額に光を注ぐ太陽は、太陽であり、彼の人間としての恋人であり、あるいは物質を変質させる能力をもった哲学者の石に近いものであるかもしれない。」(“The sun that shines on the poet's brow may be the sun, his human lover, or it may be akin to the Philosopher's Stone, with its power to transmute.” Gray 14) グレイは「天の太陽が曇るならこの世の太陽も輝きを失おう」(“Suns of the world may stain, when heaven's sun staineth.”) という最終行について、ここでは詩人が天の太陽とこの世の太陽を同一視しているという (Gray 14)。「ソネット 33 番」での太陽がはたして「哲学者

の石」をも意味するかどうかは、判断を躊躇せざるをえない。ただ、詩人にとっては若者の美は光を放ち万物を明るく輝かせる太陽のような存在であり、そのすべてを金色に変える力には超自然的能力の働きを認めているのはたしかである。

以上の『ソネット集』に収められた各ソネットのテーマごとの議論は第二部に譲るとして、グレイの著作について全体を通して不満を感じざるをえないのは、この著作の長い副題が如実に示すようにプラトンの『饗宴』、錬金術、キリスト教、さらにはルネサンスの新プラトン主義と、それぞれで相当の文献との対話を強いる分野を四つも盛り込んでいる点である。たしかにこれらの要素が相互に結びつき合っていることを否定はしない。しかし、どれか一つに的を絞るべきであったように思われる。さらに、シェイクスピアの『ソネット集』にとどまらず、さまざまな対立を含むシェイクスピアの劇テキストにまでもグレイが議論を広げているために、研究書としての焦点が曖昧になってしまっている。あるいは、ゲーテの専門家が長年温めていた自分のシェイクスピアへの想いをすべて綴ったのが、本書であると位置づけるのが正しいのかもしれない。しかし、この焦点の定まりのなさが、本書の最大の欠点になっていると言っても過言ではない。また、第四章の「『ソネット集』と『アントニーとクレオパトラ』」で、いきなり黒い女のモデルとしてシェイクスピアの頭にはクレオパトラがあったと主張したり、エピローグの部分でどういふわけか急にダンテとシェイクスピアの比較対照が始まったりする箇所などは首肯しがたいものがある。

1.5. マーガレット・ヒーリー『シェイクスピア、錬金術、そして創造的想像力』(2011)

以上、紹介してきた『ソネット集』と錬金術の関連を論じた研究は、短い論考であったり、単著であっても内容的に議論が散漫であったりと内容的に見て単独で満足のいくものとは言い難かった。ところが、本節で扱うヒーリーの著書は今まで紹介してきた研究と較べて、質、量ともに他を凌駕している。そのため、他の四つの研究に比べて、ここでは少し詳しく紹介を行いたい。

本書の特に第一章の「錬金術的文脈」(‘Alchemical Contexts’)の近代初期の錬金術をめぐる諸テキストを概観した箇所は、最新にして非常にバランスのとれた、このテーマをめぐる最良の案内となっている。プラトンの『ティマイオス』、『クリ

ティアス』、ピタゴラス学派などへの言及を行った後、とりわけ、ほかの研究者があまり言及していないイギリスの錬金術師、トマス・ノートン (Thomas Norton)、ジョージ・リプリー (George Ripley)、エリアス・アシュモール (Elias Ashmole) にまで目配せを行っている。他の研究者がプラトン、フィチーノ、ブルーノあたりを引用して満足しているのに対して、ヒーリーは当時のイギリスでの錬金術のあり方に一段と読者を近づけてくれている。

また、ヒーリーの本書を執筆する上での方針にも好感がもてる。ヒーリーは本書の冒頭の部分で、彼女の研究方針を以下のように定めている。

My approach in this book marries a precise historicism with formal concerns in the belief that the most productive studies today refuse any artificial cleavage between the two. (Healy 12)

上の引用でヒーリーが自身の研究方法を、「正確な歴史主義を形式への関心と結びつける (=結婚させる)」「(“marries a precise historicism with formal concerns”)と述べているのは興味深い。おそらく、彼女が「結びつける」という意味で「結婚させる」(“marries”)という言葉を用いているのには、「錬金術的結婚」(“*conjunction*”)が念頭にあると推察できる。「今日においてもっとも生産的な研究は、この両者を分けるいかなる人為的な分裂も拒絶するという信念」(“the belief that the most productive studies today refuse any artificial cleavage between the two”)についても、先に紹介したジョーンズやグレイが紹介している精神的背景についての知識では雄弁であっても、詩の分析となると説得力が十分でないように映ることを考えあわせると、貴重な指摘であると思われる。実際、このような方針のもとに議論を進めているせいか、先に言及したジョーンズやグレイの著作に比べて、ヒーリーの研究は学問的に堅実なものとなっている。

さらにヒーリーの著作の特徴として、シェイクスピアと錬金術の関係を示すに当たって文字媒体だけに頼らず、当時の図像、エンブレム、建築、音楽などさまざまな媒体を通していかに錬金術的発想が当時の人々の思考に溶け込んでいたかを多面的に描き出している点を指摘できる。なかでも、とりわけヒーリーの著作において

読者を惹きつける要素に、ドレイク・ジュエル (Drake Jewel) と呼ばれるニコラス・ヒリアード (Nicholas Hilliard) 作のエリザベス一世 (Elizabeth I) のミニチュア画を含む装飾品の紹介がある。³ヒーリーの述べている通り、この装飾品は海外に探検家として旅をしたフランシス・ドレイク卿 (Sir Francis Drake) がエリザベス女王に対して献上した品々への返礼として女王から送られたとされている (Healy 105-108)。この装飾品の表には白い男性の浮かし彫の上に黒い女性が重ねて描かれている。さらに、その裏側の蓋を開くとエリザベス女王の肖像と彼女を表す鳥として描かれた不死鳥 (the phoenix) が姿を現す仕組みになっている。白い男性と黒い女性、錬金術においてしばしば「哲学者の石」 (the philosopher's stone) を表す「不死鳥」の象徴性など、これらは絶世の美男子である「若者」と美しくはないが魅力的な「黒い女」を扱った『ソネット集』、さらには不死鳥への言及を含む「恋人の嘆き」 ('A Lover's Complaint') の主題と大きく重なり合う。この装飾品と『ソネット集』がどれほど密接に結びついていたかについては、今後の議論に負うところが大きいだが、このペンダントが醸し出す『ソネット集』との同時代性は大いに注目すべき点である。

この著作の各論については第二部に譲るとして、ここでは簡単にヒーリーの議論の流れを要約しておこう。ヒーリーは第一章での詳細な近代初期イギリスの錬金術に関する文化的背景を紹介した後、第二章では『ソネット集』の若者に焦点が当てられ、当時は結婚が錬金術的結合 ('conjunction') と考えられていたこと、男子同士の友情こそ真の友情であると考えられていたことなどを指摘する。さらに、(図2) のトマス・トレシャム (Thomas Tresham) の三角形や円などの幾何学模様を側壁に描いた「三角形のロッジ」 (the Triangular Lodge) を例に引き、いかに日常に数秘学的思考が根づいていたかを示した後、アラステリア・ファウラー (Alastair Fowler) から引き継いだ『ソネット集』の若者を扱った詩群の数秘学的トライアングル構造に再考が加えられる。



(図2) トマス・トレシャム
「三角形のロッジ」

第三章では黒い女と、当時の黒という色に関する言説が扱われている。『聖書』の「雅歌」(‘Song of Solomon’) に現れる黒い女がキリストに対する教会を表すと考えられていた事実や、黒を洗い流して白に変える方法について触れた後、先ほど言及したドレイク卿に献上されたペンダント、ドレイク・ジュエルにヒーリーは言及する。第四章では『ソネット集』とともに出版された「恋人の嘆き」が組上に載せられる。ブライアン・ヴィッカーズ (Brian Vickers) がこの詩はシェイクスピアの手によるものではなく、ヘレフォードのジョン・デイヴィス (John Davies of Hereford) の作であると、レポートや論文での盗用を発見するソフト、文学のデータベース、さらに文体分析を駆使して証明を試みた研究に、ヒーリーは正面から異論を唱える。不死鳥などの錬金術の主題で本編の『ソネット集』と密接に結びついている事実を例に挙げ、「恋人の嘆き」はシェイクスピア自身が書いたものであると主張している。

続く第五章では、ヒーリーはマーツ (Louis Martz) の『瞑想の詩』 (*The Poetry of Meditation*, 1962) に依拠しながら、『ソネット集』が内面と外面の問題を大きく

扱った内省的な詩集であるとし、『ソネット集』をジョージ・ハーバート (George Herbert) やジョン・ダン (John Donne) などの瞑想的な詩人たちのテキストへと連なると位置づける。結論部では、『テンペスト』などシェイクスピアの他のテキストの吟味、ほぼ同時代のダンやハーバートの詩についての考察、人智学 (theopathy) やファミリスト教徒 (the Family of Love) といった当時の宗教的背景についての紹介を経て、錬金術的思考がシェイクスピアとその同時代の作家にとって「創造的想像力」(creative imagination) を生む素地になっていると結論づけている。

以上、簡単にヒーリーの著作の要約を行ったが、テキストの細かな吟味、当時の文化的背景を探るための資料収集などいずれの点においてもヒーリーの研究は体系的で終始一貫している。また、その学問的な手続きも堅実で、その議論は概ね説得力をもっている。ただ、ヒーリーの研究の問題点を指摘するならば、以下の二つの点を挙げるができるであろう。まず、第一に彼女が錬金術についての非常に広範な知識をもっていることは明白ではあるが、時として『ソネット集』自体の分析より術学的な知識の羅列に走る傾向が見受けられる。第二に、最終章で錬金術的発想がシェイクスピアはおろか、ダンやハーバートらにも共通して見られる、当時の作家たちに共有されていた共通の基盤であったことを、彼女の造語である「創造的想像力」という言葉で表そうと少し急ぎすぎていることが指摘できる。おそらくこれだけ大きな主題を扱おうとすれば、大部な著作がもう一冊必要となるであろう。『ソネット集』と錬金術の関連をテキスト内の説明だけでは説明し尽せなかったために、その説明をテキスト外の同時代性や精神的背景に求め、最終的に結論にまとまりがなくなってしまう観が否めない。とはいえ、これらの問題点を差し引いても、ヒーリーの論考は『ソネット集』と錬金術の関連を論じた記念碑的な著作であり、今後もこれを基準としてさまざまな研究が試みられて行くに違いない。

第一部まとめ

以上、シェイクスピアの『ソネット集』と錬金術の関連について紹介を行ってきたが、テーマが難解であるがゆえにその研究の成果もまさに玉石混淆の状態である

現状を伝えることができたと思う。ウッドブリッジがジョーンズの研究書を評した際に、この研究分野について「神秘的な」(“arcane”)という形容詞を用いていた事実は、この分野の研究がともすればいわゆる「トンデモ本」になりかねない可能性を暗示している。おそらく一般的な近代初期の演劇研究者からの反発として、演劇をあくまでもエンターテイメントとして鑑賞するべきであるとの批判が予測される。ただ、シェイクスピアが活動した頃のイギリスはまだ近代科学が十分な発展をしておらず、人々は迷信を信じ、懐疑心をもちながらも錬金術の言説を身近なものとしていた事実は、たとえばヒーリーの「錬金術的文脈」と題した章がわれわれに提示してくれている。また、錬金術を軸にシェイクスピアのテキストを読み解こうとする試みは、科学史や医学史との学際的交流を促し、シェイクスピアを多面的に理解するのに役立つであろう。したがって、上演史、本文校訂、伝記研究、文学批評などと同様に、史的資料との擦り合わせによる当時の文化的コンテキストからのテキスト理解も重要である。

とはいえ、フランシス・イエイツの批評自体がしばしば「幻視的」(“visionary”)であるとの批判を受け、シェイクスピアの時代のテキストにヘルメス主義を読み込もうとしがちであった研究姿勢も批判に晒されている。このような現状のもとで、たとえばヒーリーが強調していた健全な歴史研究とテキスト読解の絶妙な組み合わせは、とりわけ謎めいた領域を扱う研究には欠かせない研究態度であろう。

しかし、本論で扱ったのはまだ主要な研究の概観にすぎない。まだまだこれらの研究を個々のテーマや論点ごとに整理し、それらを吟味する必要がある。たとえば、本論で紹介した研究者たちがルネサンスの思想家や錬金術師のテキストをどのように解釈し、彼らの議論を補強する上で用いているか。また、若者、黒い女、詩人といった『ソネット集』に現れる何人かの登場人物に、どのような錬金術の意味を彼らが見出しているのか。また、『ソネット集』での具体的なソネットについて、各研究者の間でどのような違いがあるのか。後に発表する各論を吟味する第二部では、以上のような問いを論じたい。

注

1. この論文の表題の「ウィル」(Will)には『ソネット集』でシェイクスピアが、“Will”という単語に複数の意味をもたせているという事実が前提にある。「意志、欲望、男性器」などの意味以外に、シェイクスピア自身の名前、「ウィリアム」(William)の略称「ウィル」(Will)の意味もこの表題には暗示されていることを読者は意識するべきである。
2. なお、本論でのシェイクスピアの『ソネット集』(*Shakespeare's Sonnets*)からの引用は、すべて以下の版による。William Shakespeare. *The Complete Sonnets and Poems*. Ed. Colin Burrow. Oxford: Oxford University Press, 2002. また、日本語訳については、ウィリアム・シェイクスピア『ソネット集』高松雄二訳(岩波文庫、1986)を参照した。
3. 本来ならばドレイク・ジュエルの画像を掲載するべきであるが、ヒーリーの著作を含め、通常の書籍では所蔵先となっているヴィクトリア・アルバート美術館に問い合わせたところ、この装飾品は匿名の所有者(“anonymous owner”)の持ち物であり、掲載許可を得られるには数か月を要するとの返事をいただいた。本論の印刷時期を勘案した結果、掲載許可を得ることを断念した次第である。なお、この図像はいくつかのウェブ上のホームページで見ることが可能である。以下、代表的なホームページのアドレスを紹介しておく。‘The Drake Jewel’ Tudor & Elizabethan Portraits:
http://www.elizabethan-portraits.com/Elizabeth_I.htm 2012年11月27日

参考文献

- Cheney, Patrick. *Approaches to Teaching Shorter Elizabethan Poetry*. Ed. Patrick Cheney and Anne Lake Prescott. New York: The Modern Language Association of America, 2000.
- Gray, Ronald. *Shakespeare on Love: The Sonnets and Plays in Relation to Plato's Symposium, Alchemy, Christianity and Renaissance Neo-Platonism*. Cambridge: Cambridge Scholar Publishing, 2011.
- . ‘Will in the Universe: *Shakespeare's Sonnets*, Plato's *Symposium*, Alchemy and Renaissance Neoplatonism.’ *Shakespeare Survey* 59 (2006) 225-238.

- Grudin, Robert. *Mighty Opposites: Shakespeare and Renaissance Contrariety*. California: University of California Press, 1979.
- Healy, Margaret. *Shakespeare, Alchemy, and the Creative Imagination: The Sonnets and A Lover's Complaint*. Cambridge: Cambridge University Press, 2010
- Jones, Thomas O. *Renaissance Magic and Hermeticism in The Shakespeare Sonnets: Like Prayers Divine*. Queenston: The Edwin Mellen Press, 1995
- Maier, Michael. *Atalanta Fugiens: An Edition on the Fuges, Emblems and Epigrams*. Trans. Joscelyn Godwin. Grand Rapids: Phanes Press, 1989.
- Shakespeare, William. *The Complete Sonnets and Poems*. Ed. Colin Burrow. Oxford: Oxford University Press, 2002.
- Simonds, Peggy. "Sex in a Bottle: The Alchemical Distillation of Shakespeare's Hermaphrodite in Sonnet 20." *Renaissance Papers* (1999), 1999, 97-105.
- van Veen, Otto. *Amorum Emblemata*. 1608
- Woodbridge, Linda. Rev. of *Renaissance Magic and Hermeticism in The Shakespeare Sonnets: Like Prayers Divine*, by Thomas O. Jones. *Renaissance Quarterly* 51 (1998), 678-679.
- Yates, Frances A. *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*. London: Routledge & Kegan Paul, 1964.
- . *Shakespeare's Last Plays*. London: Routledge, 1975.
- イエイツ、フランシス 『ジオルダーノ・ブルーノとヘルメス教の伝統』 前野佳彦訳 (工作舎、2010)
- . 『シェイクスピア最後の夢』 藤田実訳 (晶文社、1980)
- . 『世界劇場』 藤田実訳 (晶文社、1974)
- 小関恵美 「シェイクスピアのソネット 20 番における錬金術的象徴体系」 『芸文研究』 48 (1986), 29-50.
- シェイクスピア、ウィリアム 『ソネット集』 高松雄二訳 (岩波文庫、1986)
- 'The Drake Jewel' Tudor & Elizabethan Portraits:
http://www.elizabethan-portraits.com/Elizabeth_I.htm 2012年11月27日